

歴史学における証拠の物語負荷性に関する議論

苗村 弘太郎*

Controversy over narrative-ladenness of historical evidence

Kotaro NAMURA

§1 導入

歴史学における証拠に関する議論は、歴史学に関する哲学的考察の伝統において大きな注目を集めてきたテーマではない。しかしながら、証拠に関する問題は決して哲学者によって見逃されて来たわけではない。証拠の問題に取り組んだ先駆けとして歴史哲学者コリングウッドが引かれるように¹、歴史学を考察の対象とする哲学者は証拠にまつわる問題にいち早く着目しており、議論は着実に蓄積されてきた。歴史家自身による考察においても、証拠が繰り返し主題となっていることも見逃すわけにはいかないだろう。

そのような歴史学における証拠の問題に関わる研究の一つとして、歴史学における証拠は背景知識から独立しているのかという問題を扱う Hurst (1981) の紹介を行おう。歴史研究には補助科学としての史料研究が発達していることに鑑みると、証拠が一切の背景知識から独立していると考えにくいことは自明にも見える。しかしながら、この問題を提起した Hurst (1981) はさらに進んで、歴史学における証拠は「過去の出来事に関する歴史家たちの物語 (narrative) から独立していない」と主張している²。歴史家が物語を構築する際に土台となるはずの証拠が物語に依存しているという主張は過激なものにも見える。果たして、McCullagh (1984) による反論が存在するが、その反論に対する Kosso (1993) による再反論も存在しており、一方的に Hurst の議論を低く評価することもできない。

* 京都大学文学研究科科学哲学科学史専修修士課程

¹ Chandler, Davidson, and Harootunian 1994, p. 1 ; Kelly 2014.

² Hurst (1981, p. 278) を参照。なお、野家啓一の歴史の物語り論において指摘される歴史の全体論は本稿で検討する Hurst (1981) の指摘に非常に似ている野家 (2005, pp. 177-182)。なお、野家の主張に対する批判としては遅塚 (2010) による批判があり、この批判への野家の再反論として野家 (2011) がある。

本稿の目的は、この主張をめぐる議論を整理することによって、Hurst (1981) の主張に対してどこまで合意が存在しどのような問題が指摘されているのかを明確にすることである。本稿による整理によって、証拠の物語負荷性を弱い意味で解釈する限り、歴史学における証拠が物語負荷性を持つことへの反論が存在しないことが明らかになる。また証拠が物語負荷性を持つという主張の極端に相対主義的な帰結を回避する方策が存在することが確認される。本稿は以下の構成をとる。まず、証拠の物語負荷性に関する Hurst (1981) の主張を検討し、加えてこの主張に対する McCullagh (1984) による反論と Kosso (1993) による再反論の検討を通じ、彼らの間に Hurst (1981) の主張および問題点に関して実質的には合意が見られることを見る (2 章)。次いで、証拠の物語負荷性に関する主張が帰結する極端な相対主義の問題をどのように回避できるかについて、どのような答えが利用可能であるかを検討する (3 章)。最後に、本稿における検討内容を再整理する (4 章)。

§2 証拠の物語負荷性に関する議論

本章においては、Hurst (1981) 「証拠の神話 (the myth of the evidence)」によって提示された証拠の物語負荷性をめぐる議論を検討する。まず Hurst (1981) における、証拠の利用は出来事に関する歴史家の信念から独立ではなく、証拠は歴史家の採用する物語に依存しているという主張を概観する (2.1)。次いで、Hurst への反論を行う McCullagh (1984) と McCullagh (1984) による議論に再反論する Kosso (1993) に検討を加える。この検討を通じて、McCullagh (1984) は Hurst (1981) の主張を、Kosso (1993) は McCullagh (1984) の主張を誤って捉えており、これら 3 つの研究の主張は実は互いに矛盾していないと論じる (2.2)。

2.1 証拠の物語負荷性

Hurst (1981) は先行研究に共有される「証拠の神話」を批判している。この証拠の神話とは、歴史家は何の前提も無しに証拠となる物体に記述を与えることができるという考えだとされている。歴史家が考古学的遺物や文書といった物体を証拠として過去に関する言明を正当化する際には、これはしかじかの型の土器である、しかじかの時代にしかじかの目的で作られた文書である、といった記述を証拠に与えることが必要になる。このような記述が何の前提も無しに与えられるという前提を彼は証拠の神話と呼び、先行研究におけるこの前提を放棄するべきだと論じる。

Hurst が証拠の神話に反対して提示する主張は以下の3点を含んでいる。

- (a) 証拠を利用すること自体が背景知識による正当化を必要とする。
- (b) 証拠の利用の正当化に当たっては、史料に関する研究ばかりでなく、すでに知られている出来事に関する信念（仮説）との整合性が問題になる。
- (c) 証拠の利用の正当化には、すでに知られている出来事に関する仮説群が整合的な物語を作ることが必要である。

歴史学において史料を扱う補助科学が発達していることを考えれば、(a) 歴史学においても証拠が理論的負荷的であること自体は驚くに足りないと思われるかもしれない。しかしながら、彼が提示する主張はさらに論理的に強く見えるものである。(b) 証拠を用いることは、出来事に関する信念から独立ではないばかりか、(c) 証拠を用いることは物語的負荷的 (narrative-laden) でもある。すなわち、証拠を用いることは歴史家がどのような物語を選択するのかと独立ではないという。これらの主張を順に見ていこう。

証拠の利用が正当化を必要とすることはすぐに見て取れる。何らかの出来事が起こったという記述を含む記録史料が発見されたとして、この記録史料の利用には様々な正当化が必要になる。この記録史料は後世の偽作ではないか、偽作では無かったとしてその記述にどれほどの信頼性が認められるのかといったことを歴史家は史料に関して確認する。このような正当化は歴史家の知識体系に依存しており、証拠がそれ自身として証拠としての役割を持つことはない。記録史料の信頼性を判断するには、記録史料がいつの時代に誰の手によって作成されたのかといった情報が必要になる。このような情報を史料から読み取るには史料の語彙や文体や形式に関する知識が必要になる。物的証拠の場合でも同様に、遺物に記述を与えること抜きに証拠として用いることはありえない。この意味で証拠の利用は理論的負荷的と言ってよいだろう。

それにとどまらず、証拠の利用の正当化は、出来事に関する歴史家の信念にも依存している。つまり、証拠の利用の正当化は、証拠の信頼性に関する単独の仮説の選択ではなく、出来事に関する仮説を含んだ仮説群の選択でもある。例えば、ある石について、これが人の手になる石器であるかを判断する場合を考えよう。この石の形状は、人力でそのような形状に仕上げるのが不可能であるような形状であったとする。この時、このような形状に人力で仕上げるのは不可能だからこの石は石器ではありえないという推論が想定できる。この推論は石器に関する単独の仮説の選択にとどまらず、仮説群の選択となっている。というのも、この石を過去の人類が強い腕力を持っていた証拠とみなす可能性が論理的には残されているからである。すなわち、一方では、

この石は過去の人類が残した石器であるという仮説と、この石は過去の人類がそれだけ強い力を持っていたとする仮説からなる仮説群があり、他方では過去の人類はそんな強い力を持っていないという仮説とこの石は石器ではないという仮説からなる仮説群の二つの仮説群が存在する。この石は石器ではありえないという判断はこのうち後者の仮説群の選択となっている。ここで前者が実際には選択されないのは、過去の人類の腕力に関する信念が強力であるためであり、この信念が強力でない場合には、この石が石器と見なされる可能性も論理的には存在している。つまり、証拠に関する判断を下すとき、歴史家は証拠に関する単独の仮説を扱っているのではなく、背景知識も含んだ仮説群の選択を行っていると考えられるのである。

証拠の利用の正当化が仮説群の選択となるのは、証拠となる文書の制作の意図や製作者の同定においても同様である。Hurst は次のような例を挙げる。Hurst によると、ローマにあるフラ・アンジェリコ様式のフレスコ画はフラ・アンジェリコの信奉者かフラ・アンジェリコのアトリエの一員によるものだと判断されるという。このように判断が下されるのは、その絵が描かれた時期にフラ・アンジェリコはローマではなくフィレンツェにいたことが知られているためである。この推論も単独の仮説の選択ではなく仮説群の選択とみることができる。すなわち、フレスコ画の著者がフラ・アンジェリコであり彼は当時ローマにいたという仮説群と、著者はフラ・アンジェリコではなく彼は当時ローマにいなかったという仮説群の間で選択が行われている。つまり、著者に関する記述を証拠に与えること自体が、著者に関する仮説と著者と目される人物の所在に関する仮説を含む仮説群の選択となっているのである。

このようなわけで Hurst によると、歴史学における証拠の利用は単に理論負荷的であるわけではなく、出来事に関する仮説を含んだ仮説群に依存している。だが、これにとどまらず、歴史学における証拠は物語依存的であると Hurst は主張する。個別の出来事に関する言明と個別の出来事や変化に関する言明を関連付ける物語とを区別すると、証拠の利用は単なる言明のみならず物語のネットワークに依存しているということになる。ここではこの主張をもう少し詳しく見ておこう。

Hurst は単独の出来事に関する言明と、変化に関する言明を区別する。彼によれば変化は直接観察されるものではなく、単独の出来事に関する言明とは区別される。そして出来事に関する言明と変化に関する言明を含むことで物語が形成されるという。このような物語に証拠が依存している例として、遺物や文書を証拠として用いるために、それら証拠となる遺物や文書が我々に利用可能になっている経緯に関する物語が必要になることを指摘する。例えば、遺跡から発見された石をしかじかの種類の石器

として分類する時には、この石器は、この付近から採取された岩石によって作成されたものなのか、それとも遠方から運びこまれてこの遺跡に残されたのかというように、この石器が遺跡に残されることになった経緯に関して説明を与える必要がある。これは文書史料の場合も同様であって、偽作の可能性や記述の信頼性を問題にする際には、文書が作成された経緯や現在ある形で残されるに至った来歴が問題になる。このような場面においては、証拠が依存しているのは単独の出来事に関する言明ではなく変化に関する言明を含む物語だという。

Hurstによればこのような物語の総体として物語のネットワークがあり、歴史家が証拠を利用する際には物語のネットワークの全体の選択を行っているという。彼は次のような例を挙げる。ある文書に、これはナポレオンがしかじかの日にパリで著した手紙だという記述を与えよう。その一方で別の文書に、これはナポレオンがまた別のしかじかの日にローマで著した手紙だという記述を与えよう。その際には、前者の記述には、しかじかの日にナポレオンがパリにいたという言明が必要になり、後者の記述には、別のしかじかの日にローマにいたという言明が必要になる。この両方が真であるためには、しかじかの日からまた別のしかじかの日の間にナポレオンがパリからローマへ移動したという言明が必要になる（別のしかじかの日の方が後だとして）。彼によればこのような連鎖に終わりはなく、この連鎖は歴史家の物語のネットワーク全体へ波及していくことになる。このようなわけで、証拠が依存しているのは単独の出来事や変化ではなく、より大きな物語のネットワークなのであり、歴史家が証拠を利用する際には、物語のネットワークを選択していることになるのである。

本節で見てきた Hurst (1981) の論点を今一度振り返っておこう。歴史家が証拠を用いる際には、(a) 証拠を利用すること自体が背景知識による正当化を必要とすることを確認した。次いで Hurst によれば、証拠に記述を与えることは、知られている出来事に関する仮説を含んだ仮説群の選択であり、したがって、(b) 証拠の利用の正当化に当たっては、史料に関する研究ばかりでなく、すでに知られている出来事に関する知識（仮説）との整合性が問題になることが確認された。これにとどまらず、証拠の利用の正当化には変化に関する言明が必要になる以上、(c) 証拠の利用の正当化には、すでに知られている出来事に関する仮説群が整合的な物語を作ることが必要であると Hurst が主張していることが確認された。

2.2 証拠の物語負荷性への反論および再反論

本節では、証拠の物語負荷性に関する McCullagh (1984) による批判およびその反論に対する Kosso (1993) による批判を検討していく。これらの議論を検討するのは、これらの議論の検討が、Hurst の議論の評価に役立つにとどまらず、Hurst の主張の正確な理解にとっても重要となるためである。以下に見るように、McCullagh (1984) および Kosso (1993) は共に批判相手の立場を誤って解釈しており、この誤解を確認することで、Hurst の主張を誤って解釈し、不当な批判を行うことを防ぐことができる。

より具体的には、物語負荷性を巡る議論においては、以下の 3 つの主張の中で互いに相手の主張とは異なる主張を帰することが行われている。

- (1) 仮説のネットワークとは独立に、証拠は機能する。
- (2a) 整合的な仮説のネットワークを作ることなしに、証拠は機能しない。
- (2b) 整合的な仮説のネットワークを作るならば、証拠は機能する。

(1) は証拠の物語負荷性を完全に否定する立場である。(2a) と (2b) の違いは、仮説のネットワークの論理的整合性を、仮説が十分な証拠に裏付けられていると認められるための必要条件とするか十分条件とするかにある。(2b) を認めた場合、現在利用可能な証拠と整合的な (矛盾しない) 推測はいくらでも認められることになり、利用可能な証拠と矛盾しない想像を織り交ぜた歴史小説と歴史家の仕事の区別がつけられなくなってしまう。一方 (2a) にとどまる限り、仮説のネットワークが整合的であっても、整合性以外の制約によって仮説のネットワークが採用されない可能性を残すことになる。物語負荷性を巡る議論においては、(2a) に合意している者同士が、(2b) を擁護しているとして (2a) の主張者を批判し、(1) を主張しているとして (2b) の批判者を批判するという議論の構図が見られる。

具体的には、以下のような状況が存在することを見ていくことになる。まず、McCullagh は Hurst の主張を (2b) の主張と見なしているが、Hurst の立場は (2a) であり、(2b) を主張しているとみなすべきではない。というのも、Hurst の主張は上で紹介した論文の中で、証拠の物語負荷性を認めた場合に極端な相対主義が帰結する可能性に触れており、この帰結をいかに避けることができるかを検討している (この議論は 3 章で検討する)。つまり、極端な相対主義を帰結する (2b) のような主張は Hurst 自身避けていると見なければ不公平である。つまり、McCullagh は Hurst の主張を誤って (2b) と見做している。一方で、McCullagh は (2b) を批判するものの、(2a) を認め (1)

を支持しない立場にとどまっているにも関わらず、Kosso は McCullagh が (1) を主張しているとして批判を行っている。

本節では以上のような構図が論戦に存在することを見ていくことで、まず、(2a) の立場を (1) や (2b) と取り違える危険の存在を指摘する。次いで (2a) に対しては有力な批判が存在していない一方で、(1) や (2b) を維持しようとするには様々な問題が指摘されていることを確認する。なお、(2a) を維持しながら (2b) をどのように回避することができるかについては次章で検討することとする。

本節の検討は次の順に行う。まず、McCullagh (1984) による Hurst への批判を検討し、この批判が Hurst の主張を (2a) ではなく (2b) と見做していることを確認する。次いで、Kosso (1993) による McCullagh (1984) の批判を検討し、この批判が McCullagh の主張を (2a) ではなく (1) と見做していることを確認する。

まずは、McCullagh (1984) による Hurst への批判を検討し、この批判が Hurst の立場を先の整理における (2a) ではなく (2b) と解釈していることを見ていこう。McCullagh (1984) は反論にあたって、Hurst の議論を次のように要約する³。歴史学において、証拠から過去に関する言明を推論するとは、他の信念と整合的な仮説を形成することである。というのも、歴史学における証拠は物語から独立の支持を歴史家に与えることはないからである。証拠の意味を判断する際には、他の信念を参照する必要があり、他の信念は物語の中にあるため、物語とは独立に証拠が機能することはありえない。

以上の要約を踏まえ、McCullagh は次の点を指摘する。彼によると、証拠に対してある記述を与えることを可能にする何らかの特徴が証拠にあり、証拠がその特徴を持っているということ自体は我々の信念から独立である。彼は Hurst が用いた例を説明に再利用している。ある絵画がフラ・アンジェリコによるものだと判断するとき、何らかの特徴を絵画が持っていることを根拠にそう判断するだろう。この時、その特徴が、フラ・アンジェリコの絵画の特徴とされるものと合致していると考えることが解釈である。だが、絵画がその特徴を持っているということ自体は、その絵が誰の手によるものであるという信念からは独立である。そしてこの特徴抜きに、この絵画がフラ・アンジェリコの手になるものだという結論が根拠づけられることはないのである。

絵画の持つ特徴がフラ・アンジェリコの絵画が持つとされる特徴と合致すると考えることは解釈に過ぎないとしても、この点は彼の主張には関わらないという。というのも、他の信念とは独立に観察できる特徴抜きに仮説が根拠づけられないことが明ら

³ McCullagh 1984, pp. 12-14.

かになれば彼の主張にとって十分であるためである。つまり、仮にある特徴がフラ・アンジェリコの絵画が持つとされる特徴と合致すると考えるために背景知識が必要だったとしても、その特徴自体は背景知識抜きに観察されうるものだとは言える。これが言えれば十分だというわけである。

この反論は Hurst の主張を誤って解釈していると見てよいだろう。冒頭にも確認したように、Hurst の議論には次の二つの解釈が存在する。

(2a) 整合的な仮説のネットワークを作ることなしに、証拠は機能しない。

(2b) 整合的な仮説のネットワークを作るならば、証拠は機能する。

この二つのうち、McCullagh が Hurst にの主張と見做しているのは明らかに (2b) である。そう見るべき理由の 1 つは、McCullagh の指摘は (2b) に対しては有効な反論になっているものの、(2a) に対して修正を迫るものではないからである。彼が主張するように、背景知識から独立な特徴が存在し、歴史家がこれを無視できない場合、整合的な仮説のネットワークをすべて許容する (2b) の主張とは食い違うことになる。一方で、仮に背景知識から独立な証拠の記述が存在するとしても (2a) とは必ずしも矛盾しない。その記述のみでは過去の出来事や変化についての記述を得るには不十分であり、それらの記述と背景知識が合わせて必要になる場合、背景知識との整合性を考慮すること抜きに証拠が機能することはないという (2a) の主張とは矛盾しない。そして彼はこのことを認めてしまっている。というのも、先に見た、絵画の特徴がフラ・アンジェリコの絵画とされる絵画の特徴と合致すると考えることは解釈に過ぎないとしても、反論としては十分だという主張は、裏を返せば彼の議論は合致すると考えることは解釈に過ぎないという主張と矛盾しないということであるからだ。したがって、彼の反論は (2b) に対しては有効だが、(2a) に対しては無効である。

McCullagh が Hurst の主張を (2b) と考えていると見るべきもう一つの理由は、彼自身が (2a) を認めてしまっていることである。Hurst の議論を検討しているすぐ前の箇所において、「個別の言明の真理に関する判断が他の信念に制約されていることは確かではある」、「歴史家は彼が研究している主題について整合的な説明を迫及する⁴」と述べている。つまり「個々の言明の受け入れも他の言明に依存している」という (2a) と同等の主張を受け容れてしまっているのである。それにも関わらず、Hurst への反論を展開しているのは、McCullagh が Hurst の立場を (2b) と見ているためと思われる。

⁴ McCullagh 1984, pp. 12-14.

なお、絵画の持つ特徴がフラ・アンジェリコの絵画が持つとされる特徴と合致すると考えることは解釈に過ぎないのではないかという点に関しても反論を行っているが、にも関わらず McCullagh の立場は (1) ではなく (2a) にあると見るべきである⁵。Kosso による彼への反論を検討するために重要であるため、この点を確認しておこう。彼によれば、歴史的記述の信頼性が、観察できる証拠に関する信念と同等以上に他の信念との整合性に依存していると考えるのは誤りである。史料解釈にあたっては、一般的な知識が参照されることが指摘されるが、その一般的な知識が受け入れられるのは、それが観察できるものと一貫していることが少なくとも必要である。したがって、よく正当化された過去に関する記述が受け入れられるのは、それが観察可能なデータに基づいているためであり、だからこそ想像の産物とは区別されるのだという。一見この主張は (2a) を批判しているように見えるかもしれないが、ここで主張されているのは、証拠から独立な観察が存在することのみであり、先に見たようにこの主張は (2a) と両立する。すでに見たように (2a) を認めていることを考慮すれば、彼の立場は (1) ではなく (2a) にあると見るべきである。

次いで、以上の McCullagh の議論に対する Kosso (1993) の批判は、McCullagh の立場を本節冒頭の整理における (2a) ではなく (1) と捉えてしまっていることを見ていこう。Kosso (1993) における主張の 1 つに、認識論的な基礎付け主義は歴史学の研究に成り立たず、認識論的整合説が成り立つという主張があり、この主張は (1) が誤っているという主張と同等と見ることができる。Kosso は先行する Kosso(1992) において、物理学における観察について、観察と理論の境界が明確には引けないと主張し、加えて歴史研究においても同様であると論じている。この立場からすれば、観察を認識論的な基礎と見做すことができなくなるため、自然と認識論的な整合説が帰結することになる。事実、Kosso (1993) は認識論的な整合説が歴史学の研究にも成り立つことを主張する。彼は歴史研究における証拠の利用はそれ自体が正当化を必要とすることに注目し、文書史料の信頼性はいかにして判断されるのかという問いを立てる。事例を通じた検討の結果、証拠の信頼性の指標になるのは我々が利用できる情報との整合性だけであり、認識論的基礎付け主義づけ主義は成り立たないと主張する。

以上の主張を根拠に、他の信念とは独立に証拠を用いることができると主張しているとして、つまり本節冒頭の整理では (1) の立場にあるとして McCullagh (1984) を批判している。Kosso によると、McCullagh は次のように述べている。「歴史家は一般

⁵ McCullagh 1984, pp. 91f.

に過去についての自らの結論を現在観察できる証拠についての信念に基づいて正当化する。この事実は、過去に関する記述の信頼性は過去に関する他の受け入れられた信念との整合性に基づくと信じる者を落胆させるかもしれない⁶」。Kosso の要約によれば、他の受け入れられた信念とは独立に証拠を用いることができると McCullagh は主張している。つまり、Kosso は McCullagh の立場を (1) と見ている。

一方で、Kosso が検討してきた例において、証拠の利用の正当化に用いられていたのは、背景知識との整合性による論証であった。つまり本節冒頭の整理における (1) の立場が誤っていることを示していた。証拠の信頼性に関する判断が、背景知識との整合性を逃れることが無い以上、背景知識を逃れた超越的な視点などは存在せず、背景知識に照らして意味と信頼性を獲得することなく証拠の役割を果たすことはありえない。この主張に従えば、(1) の立場にある McCullagh の主張は誤っていることになる。

この反論は、やはり McCullagh の立場を誤って捉えていると見てよいだろう。本節冒頭で見たように、証拠の物語負荷性をめぐる議論には 3 つの立場があった。

- (1) 仮説のネットワークとは独立に、証拠は機能する。
- (2a) 整合的な仮説のネットワークを作ることなしに、証拠が機能することはない。
- (2b) 整合的な仮説のネットワークを作るならば、証拠は機能する。

Kosso の反論は、(2a) にある McCullagh の立場を (1) と見做すことに基づいた反論と見るべきである。というのも、先に見たように、McCullagh は (2b) を批判しているのであって、(2a) を批判しているわけではなく、むしろ (2a) を認めてすらいるためである。事実、Kosso が引用している箇所が目玉は (2b) の批判にあるのであって、(2a) の批判にあるわけではない。McCullagh は Kosso が引用した部分の前後で次のように述べている。「この事実は、次のように信じる者、すなわち、歴史的記述の信頼性は、それらの記述が観察できる証拠に含意されているかどうかと、少なくとも同等に、それらの整合性に依存していると考える者を落胆させるかもしれない。しかしながら、歴史記述の正当化に関するこのような想定は、歴史家にとっての証拠の重要性を十分に伝えていない。このような想定は、歴史家の信念の強さに程度を認めていないのだ」。

⁶ Kosso (1993, p. 5) を参照。なお、この引用は不正確であり、原文は、「この事実は、観察的できる証拠によって含意されている (implied) かどうかと少なくとも同等以上に、他の信念との整合性に依存していると考える者を落胆させるかもしれない」(McCullagh1984, p. 91) となっており、誤った引用である。

当該箇所では McCullagh が問題にしているのは信念の強さの程度であり、すでに受け入れられている信念と整合的ではあるが、証拠による支持を欠いた弱い信念と、証拠による十分な支持を得ている強い信念の区別が出来なくなることを危惧している。整合性抜きに証拠を証拠として用いることが出来ると主張しているわけではない。したがって、McCullagh の主張を (1) と見るのは不公平であり、Kosso の反論は不当な誤解に基づくものと評価することになる。

以上の検討から得られたことを一度振り返ろう。Hurst の物語負荷性をめぐる議論において想定されている立場を、次の 3 つの立場に整理した。

- (1) 仮説群のネットワークとは独立に、証拠は機能する。
- (2a) 整合的な仮説群のネットワークを作ることなしに、証拠は機能しない。
- (2b) 整合的な仮説群のネットワークを作るならば、証拠は機能する。

この整理に基づき、Hurst, McCullagh, Kosso は皆 (2a) の支持者であるにも関わらず、McCullagh は Hurst の主張を (2b) と捉えて批判を行う一方で、Kosso は (2b) を批判する McCullagh の議論が (2a) を批判している (1) の立場にあると考えて批判を行っている」と論じた。この整理が認められるならば、(2a) に対する批判有力な批判は現状存在せず、(1) と (2b) に批判は集中していることが分かる。また、(2a) の主張は (2b) と勘違いされる危険がある一方で、(2b) の批判は (2a) の批判すなわち (1) の主張と混同される危険があるという教訓も引き出すことが可能かもしれない。

§3 証拠の物語負荷性の相対主義的な帰結の回避

すでに何度か触れているように、証拠の物語依存性を強調する議論には、極端な相対主義に陥る危険がある。1.2 の冒頭の区分をもう一度持ち出すと、証拠の物語負荷性を認める立場には次の二つの立場がありえた。

- (2a) 整合的な仮説のネットワークを作ることなしに、証拠は機能しない。
- (2b) 整合的な仮説のネットワークを作るならば、証拠は機能する。

1.2 でも触れたように、(2b) の主張を認めた場合、現在利用可能な証拠と整合的な（矛盾しない）推測はいくらでも認められることになり、利用可能な証拠と矛盾しない想像を織り交ぜた歴史小説と歴史家の仕事の区別がつけられなくなってしまう。したがって (2b) の主張は、証拠に基づく歴史的な主張と史実に整合的な想像がなぜ区別

できるのかを説明することができず、歴史学の客観性を説明することができない。

このような問題を避けようとするならば、(2a) の立場にとどまり、歴史学者が仮説群を選択するに当たって、仮説群のネットワークの論理整合性以外にどのような制約が存在しているかを記述することが必要になる。もし論理整合性以外に制約が存在しないのであれば、歴史的な主張と史実と整合的な想像の区別はつけられない。だが、その他の制約によって仮説群の選択が左右されていることを指摘できれば、その制約が働いているかによって歴史的な主張と史実と整合的な想像を区別できることになる。

Hurst (1981) は証拠の物語負荷性を論じた後に以上の問題を指摘し、解決策の提示を試みている。Kosso (1993) もまた、歴史家が証拠の利用を正当化する際にどのような制約が働いているかを検討している。証拠の利用の正当化とは仮説群の選択に他ならない以上、やはり Kosso による議論も、仮説群の選択にどのような制約が働いているかという問題への答えを提示していると見ることができる。そこで以下では、三者がこの問題に対してどのような答えを提示しているのかを見ていく。

3.1 対応策としての制約の記述

本節では、本章冒頭で確認した問題に対する解決策として、Hurst (1981) による議論と Kosso (1993) による議論を順に見ていく。まずは Hurst による議論から検討していこう。Hurst によると、歴史家が仮説群を選択する際に制約として働くのは、予測の成否、およびアドホックな説明の数である。予測の成否の成否から確認しよう。彼は Lakatos のリサーチプログラム論に言及しながら、予測の成否が歴史家にとっても重要であると論じる。一般に実験を行わない歴史家が予測を行っているとは考えにくい。Hurst は歴史家が史料の探索にあたって日常的に行っている予測を重視する。すなわち、「歴史家は裸で書庫に向かうわけではない⁷」のであり、彼らが書庫に向かう時には何らかの作業仮説に基づき、しかじかのような史料があるはずだと予測を立てながら書庫に向かう。彼は次のような例を挙げる。ある男性の日記に、ブリストルである女性と結婚したという記述がある場合歴史家はブリストルの公文書には記録が残っていると考え、探しに行くかもしれない。このような予測が成功すれば、仮説は検証 (corroborated) され、その仮説を含むネットワークがより確からしくなると考える。先の例では、実際に記録が発見されれば、仮説はより確かになるだろう。もちろん

⁷ Danto 1965, p. 110.

ん、見つからなかったからといって仮説が反証されることは無いが、予測を成功させられないネットワークを支持し続けることは、Lakatos のリサーチプログラム論に従えば後退的なプログラムを支持することになり、好ましくないと考えるわけである。

その一方で、第二に、彼はアドホックな説明の数による判断も提示している。歴史的な言明は真であるか偽であるかではなく、より確立されているかいないかだとしてつつ、歴史的な言明がより確立されているとは、よりアドホックな説明が少なく、その言明を退ける際により多くの改訂が生じてしまうということなのだという。Hurst の例を用いると、ワーテルローの戦いが 1816 年に起こったという言明は多くの証拠に支持された非常によく確立された言明である。この言明を退けるには、この言明を支持する証拠と整合的な言明をも含む大量の改訂が生じてしまう。この制約に従うならば、もし仮に、ワーテルローの戦いなどは実際には存在せず、あれは世界をだますためにナポレオンと行った狂言だったのだというウェリントンの手になると主張する覚書が発見されたとしても、先の言明が揺らぐことはないだろう。なぜなら、先の言明を支える数多くの証拠にアドホックな説明を加えるよりも、この覚書一つにアドホックな説明を加える方がはるかに改訂が少なく済むからである。

Kosso (1993) は、証拠の利用の正当化の際に働く制約について、外的な要素による正当化と内的な要素による正当化を区別して論じている。文書や碑文を用いる場合、文書や碑文に含まれている情報を内的な要素、文書や碑文とは別のものによる情報を外的な要素としている。外的な要素による正当化と内的な要素による正当化の場合について、それぞれの場合に特有の制約を論じている。外的な要素による正当化と内的な要素による正当化の順に見ていこう。

外的な要素による正当化に共通している認識論的な制約は、正当化される証拠と正当化する証拠が独立していることである。このような制約が働く外的な要素による正当化の例を三つの類型に基づいて示している。第一は、考古学的な主張と、文書の記述が一致した場合である。Kosso が例として挙げるのは、パウサニヤスによる建築や地形についての記述と、考古学的な記述が一致すれば、両者は互いの信頼性を高め合うという事例である。第二が、複数の別の文書が同じ事実に関及している場合である。この場合、それぞれの文書は独立していることが求められる。例えばどちらかがどちらかの複写物であった場合、その記述が一致していることに証拠の能力はない。また、利用する文書の正当化をする文書は利用する文書の著者を追従する人であってはいけなしいし、正当化をする文書の記述の情報源は、正当化される文書と一致してはならない。第三が、ある文書が別の文書について言及している場合である。具体的には、

ある文書に、別の文書の著者の著述の仕方や証拠の集め方、さらにはある出来事かのようにして知ることができたのかといったことまで記述されていることがある。このような情報を集めることで、実際に起こった出来事がどのようなプロセスを経て著者にまで伝わったのかについて情報を得ることができる。この点は、考古学における中範囲の理論が、考古学的遺物がどのようにして生じたのかを説明することで、それらの遺物の証拠能力に釈明を与えることに似ている。また、これらの情報の情報源も、釈明される証拠と独立でなければならない。

次は内的な要素による証拠の信頼性の判断となる。Kosso が内的な要素によって信頼性について判断する場合には次の制約が存在すると主張する。すなわち、内的な要素は証拠の信頼性を弱めることには利用できるものの、その逆のために利用することはできないという。彼はこの主張を示すため、トゥキディデスに関する諸研究を例にとる。トゥキディデスのテキストについて、彼の叙述の信頼性を高めそうな特徴は、政治的見解については、対立するものをセットで提示し、一方の側からの見方に陥らないようにしている点だという。ところが、この政治的な見解も彼自身の政治的理想を前面に押し出すように叙述されており、効果的なレトリックにより議論が交わされるのはかえってできすぎているのではないかという評価を受けているという。その他の内的な特徴も彼の叙述の信頼性を下げるのに貢献するものばかりで、例えば叙述の非一貫性が問題とされるという。このようなわけで、内的な要素による積極的な釈明は存在せず、否定的なテストをくぐり抜けることによるのみ正当化が得られるのだとする。

以上の Hurst および Kosso の議論が、冒頭の問題への対処となりうる制約の候補である。これらの提案がどれほど歴史学実践の記述として適切であるのか、また、その他に制約が存在しないのかについては議論の余地があるが、本稿では立ち入らない。だが少なくとも、このような制約が歴史学における証拠の扱いに関する記述として成功しているならば、本章の冒頭で掲げた問いに対する一定の答えにはなっていると見てよい。というのも、どの制約を受け容れた場合も、物語の整合性のみによって物語の選択が行われることは無くなるためである。したがって、証拠の物語依存性を受け容れた場合の相対主義的な帰結を避けられるのかという問題にとって、Hurst および Kosso のようにネットワークの選択に働く制約を記述的に指摘するという方針が有効であることは確認できるだろう。

これまでに見てきた議論を確認のため整理しておこう。Hurst によって提示された制約は 2 つある。第一は、予測を成功させることが重要だとみなし、予測の失敗を繰り返す信念のネットワークを後退的とみなすべきという制約であった。第二に、言明

がより確立されているとは、その言明を退けるためにより多くのアドホックな説明が必要になることだとみなし、アドホックな説明が少ない信念のネットワークを採用すべきだという制約である。また、Kosso が提示している制約は 2 つある。第一に、証拠に対して外的な要素によって釈明を行う場合、その証拠とは独立した証拠によって証拠の利用を正当化する必要があるとしている。第二に、内的な要素によって釈明を行う場合、証拠の信頼性に対して否定的な議論を行うことしかできないとしている。

§4 まとめ

本稿の検討から得られたことは以下の通りである。まず 2.1 において、歴史学における証拠は所与ではないという Hurst (1981) の議論には、証拠の利用は (a) 歴史家の知識体系から独立ではないばかりか、(b) 出来事に関する信念から独立でなく、(c) 出来事や変化に関する言明を含む物語から独立ではないという主張が含まれることを確認した。次いで、2.2 において、McCullagh (1984) および Kosso (1993) による議論を検討した。この検討においては、Hurst の主張に関する立場として、(1) 証拠は出来事や変化に関する信念から独立に機能する、(2a) 出来事や変化に関する信念のネットワークを整合的にする限りで証拠は機能する、(2b) 証拠は出来事や変化に関する信念のネットワークを整合的にするならば証拠は機能する、という 3 つの立場があるという観点から行った。その結果、(2a) の立場を (2b) として批判してしまう、あるいは (2b) への批判を (2a) への批判と誤って捉えることが論争の原因になっており、(2a) に対する批判は実質的に存在しないことが確認できた。3 章においては証拠の物語負荷性を認めた場合に、極端に相対主義的な帰結が生じることを確認し、この帰結を避けるためには、信念のネットワークを選択する際に、ネットワークの整合性以外の制約が働いていることを指摘することが必要であることを見た。そのような制約に関する具体的な議論として、Hurst は予測の成否とアドホックな説明の数が制約になっていると論じ、Kosso は独立した証拠によって証拠の利用を正当化することの重要性と、証拠の内的な情報は証拠の信頼性を下げるために用いられるという指摘をしていることを見てきた。これらの指摘の内容自体は検討の余地があるものの、記述的に正当化の際に働く制約を指摘することは問題に対する有効な方針となっていることは指摘できた。

なお、本稿で検討された議論の状況は歴史の物語論に何らかの貢献を果たす可能性があると思われる。ただし、この可能性は、物語という概念の意味するところが、歴

史の物語論と Hurst の議論の間でどれほど共有されているかにかかっている。物語という概念を含め、今後の検討が期待される。

参考文献

- Chandler, J. K., Davidson, A. I., and Harootunian, H. D. 1994. *Questions of evidence: Proof, practice, and persuasion across the disciplines*. Chicago: University of Chicago Press.
- Danto, Arthur. 1968. *Analytical philosophy of history*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hurst, B. C. 1981. The myth of the historical evidence. *History and Theory* 20(3): 278-290.
- Kelly, Thomas. 2014. Evidence. In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, ed. Zalta, Edward N. <http://plato.stanford.edu/entries/evidence/>
- Kosso, Peter. 1992. Observation of the Past. *History and Theory* 31(1): 21-36.
- Kosso, Peter. 1993. Historical evidence and epistemic justification: Thucydides as a case study. *History and Theory* 32(1): 1-13.
- McCullagh, Christopher. 1984. *Justifying historical descriptions*. New York: Cambridge University Press.
- 遅塚忠躬. 2010 年. 『史学概論』東京: 東京大学出版会.
- 野家啓一. 2005 年. 『物語の哲学』東京: 岩波書店.
- 野家啓一. 2011 年. 「『歴史の物語り論』への批判と反批判: 遅塚忠躬『史学概論』をめぐって」. 『立正大学人文科学研究所年報』別冊 (18), 61-70.